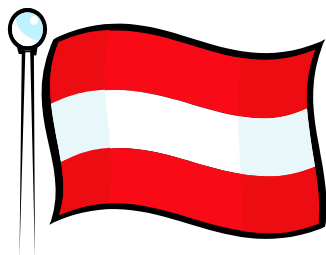


2018 年

オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区
青少年ホームステイ派遣報告書



派遣団員

飯田 愛海

小椋 詩乃

河東田 愛子

駒崎 歩

角田 聖奈

2018年オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区

青少年ホームステイ派遣報告書

<目次>

1. ウィーン市フロリズドルフ区について
2. 募集要項
3. 選考スケジュール
4. 研修概要
5. ホームステイ派遣日程
6. 受入ホストファミリー
7. 派遣団員ホームステイ報告

1. ウィーン市フロリズドルフ区について

ヨーロッパの中央に位置するオーストリア。首都ウィーン市は 640 年に及ぶハプスブルクの帝都として、華麗な文化が華ひらきました。葛飾区は、この音楽の都、宮廷文化と歴史の町ウィーン市フロリズドルフ区と 1987 年 11 月に友好都市提携を締結し、30 年間に渡りさまざまな交流を行っています。なかでも、夏休み期間中の 2 週間の青少年ホームステイ交流は、イメージとしてのオーストリアを「馴染みのあるウィーン」に変えてくれます。

青少年ホームステイ交流は、ウィーンへの派遣と受入を毎年交互に行っており、派遣の年である今年（2018 年）は、7 月 26 日から 8 月 9 日までの 15 日間、5 人の青少年が葛飾区からウィーンを訪れました。

ウィーン市の第 21 区であるフロリズドルフ区は、ドナウ川をはさんで旧市街の対岸に位置します。面積は約 44 平方キロと葛飾区よりやや広く、およそ 15 万人が暮らす、ウィーン市で 3 番目に人口の多い区です。ドナウ川沿いの中州や湿地はきれいに整備され、住宅地や大学、近代的な産業施設があり、丘陵地はワインのための葡萄畑が続いています。

5 人はそのフロリズドルフ区のホストファミリーから温かい歓迎を受け、文化や習慣の違いを楽しみ、さまざまな経験をしてきたことが、帰国後の報告からうかがわれました。ここでご紹介するのは、5 人の派遣団員がそれぞれに過ごしたウィーンで見たこと、感じたことの感想と報告です。

参加した派遣団員の国際交流は始まったばかりです。これから地域や学校などでこの経験を活かして活躍していかれることを期待しています。

葛飾区文化施設指定管理者

2. 募集要項

事業名	オーストリア・ウィーン市フロリズドルフ区 青少年ホームステイ派遣		
派遣期間	平成30年7月26日(木)～8月9日(木) 15日間		
募集人数	5名		
対象	平成8年4月2日～平成15年4月1日生れの方		
応募資格	① 申し込み時から派遣時を通して葛飾区に住所を有している方。 ② 国際交流に関心があり、派遣の目的を理解し、派遣後も区内で実施する国際交流事業に協力できる方。 ③ 健康で、海外生活やホームステイに対応ができ、区の研修、交流事業に参加できる方。 ④ 学校長、勤務先の理解が得られる方。未成年者は保護者の同意が得られる方。 ⑤ 事前・事後研修、報告会の全日程に参加できる方。 ⑥ 英語またはドイツ語で基本的なコミュニケーションがとれ、交流に意欲がある方。 ⑦ 過去に本事業で派遣されたことがない方。		
言語	英語またはドイツ語	個人負担金	120,000円

3. 選考スケジュール

4月6日(金)	応募受付開始
5月14日(月)	応募締切＜必着＞
5月下旬	書類選考結果と面接選考時間を郵送にて通知
6月3日(日)	面接選考
6月上旬	団員の内定。審査結果は全員に郵送にて通知。 ※派遣団員内定者のうち、事前研修の全日程を終了した方を団員として決定。

4. 研修概要

	日にち	研修内容
第1回	6月17日(日)	渡航手続きの説明、自己紹介、前回派遣団員の体験談
第2回	7月1日(日)	ウィーンの歴史・文化、ドイツ語講座
第3回	7月15日(日)	ホームステイ情報、現地での文化交流について
第4回	8月30日(木)	区長に帰国報告(葛飾区役所)等
報告会	11月11日(日)	かつしか国際交流まつりにて発表

5. ホームステイ派遣日程

7月26日(木)	成田発 ウィーン着、ホストファミリー対面式
7月27日(金)	製菓工場、車両試験施設見学
7月28日(土)	ホームステイ
7月29日(日)	ホームステイ
7月30日(月)	市庁舎見学、州議会議長訪問
7月31日(火)	スペイン馬術学校、キャンディー工房見学
8月1日(水)	ホームステイ
8月2日(木)	ドナウ低湿地国立公園
8月3日(金)	シェーンブルン宮殿、シェーンブルン動物園
8月4日(土)	ホームステイ
8月5日(日)	ホームステイ
8月6日(月)	区長表敬訪問、友好都市紋章花壇、葛飾通り、寅さん公園見学 プラーター公園
8月7日(火)	フロリズドルフ中央消防署見学、交流会「日本文化の紹介」 フェアエルパーティー
8月8日(水)	ウィーン発 (機内泊)
8月9日(木)	成田着

6. 受入ホストファミリー

団 員	ホストファミリー
飯田 愛海(団長)	Leuchtmann ロイヒトマン家
小椋 詩乃	Gebhard ゲブハルト家
河東田 愛子	Barth バルト家
駒崎 歩	Haindl ハインドル家
角田 聖奈	Bahr バー家

7. 派遣団員ホームステイ報告

DAD: Franz (フランツ)

明るく周りの人をいつも笑顔にしてくれ、本当の自分の娘のように接してくれました。ドイツ語でのコミュニケーションだったので心配でしたがドイツ語の単語を色々教えてくださりました。家事をたくさんやっていて家族みんなのことが大好きなパパです。



DOG: Vasty (バスティー)

2歳の元気たっぷりの男の子です。馬のぬいぐるみが大好きで、お庭でそれを投げてもらって遊んでいました。とても人懐っこく、お利口な子です。



MOM: Brigitte (ブリジtte)

料理上手でたくさんのオーストリア伝統料理を作ってくださいました。とてもチャームングでいつもニコニコしていて安心させてくれる存在でした。

The Leuchtmann Family

SISTER: Verena (ベレーナ)

2週間たくさんお世話をしてくれた5歳上のホストシスターです。おしゃべりと家のプールに浮かぶのが大好きで、大学では地理学を学んでいます。去年の派遣で葛飾に来ていて、日本が、特に日本食が大好きで、私のステイ中には一緒に日本食を2回作りました。部屋をシェアしたので寝る間には毎晩部屋で映画を見ました。今でも連絡を取り合っている仲です。



肌で感じたウィーン

飯田 愛海

(1)はじめに

私がこのプログラムに参加したきっかけは、日本文化と葛飾の魅力を伝えたかったことに加え、幼い頃から音楽に触れてきた私にとって一度は訪れてみたかったウィーンの雰囲気を肌で感じたいと思ったからです。国際色豊かな大学に通っている私は日々、相手を理解するにはその国の文化はもちろん、歴史や言語を理解することが欠かせないと感じています。そこで教科書などでしか見たことのなかったオーストリアのウィーンという都市を訪れ、現地の方々との交流を通じてオーストリアという国についてもっと知りたいと思ったのです。



フロリズドルフ区役所前にてパイパ区長と

(2)二つの発見

a:歴史の残るウィーン

空港から区役所までの道のりで車の窓から見えた景色はすでに歴史に溢れていました。道では自動車だけでなく馬車も多く走っていたのです。ホームステイ3日目は土曜日だったのでホストシスターとシュテファン大聖堂に出かけ、大きな聖堂を目の前にした時、改めて自分がウィーンにいることを実感しました。それから毎日街並みの綺麗さに圧倒されました。プログラム内ではウィーン市庁舎、スペイン馬術学校、プラーター公園をはじめ、ハプスブルク家の離宮として有名なシェーンブルン宮殿へも行くことができました。ホストファミリーに連れて行っていただいた美術史博物館とベルヴェデーレ宮殿では、多くの有名な美術作品を生で見ることができ、中でも圧倒的な存在感のあったクリムトの『接吻』を見た時の感動は今でも胸に焼きついています。

また音楽の都として有名なウィーンの街では、あらゆるところにストリートミュージシャンがいました。クラシック、ジャズ、ただ歩いているだけで音楽が聞こえてきたの

です。そして建築物としても有名なカールス教会ではヴィヴァルディ作曲『四季』のコンサートも楽しむことができました。有名な劇場でのコンサートもいいですが、教会での演奏は独特な響きと荘厳な雰囲気に入れ、一生聞いていたいほどの演奏でした。



カールス教会でのコンサート

食事に関しては、ホストマザーが「オーストリアの人はオーストリア料理が大好きなの。」とおっしゃっていた通り、毎日色々なオーストリア伝統料理をいただきました。朝食ではアプリコットのジャムの入ったパラチンケンやアップフェルシュトゥルーデルを作ってくださることもありました。ウィナーシュニッツェルやグラーシュなどのオーストリア伝統料理、そして伝統的な飲み物であるアルムドゥドラーもいただくことができ、毎回の食事が全て新鮮に感じられました。

ウィーンは目でも耳でも舌でも楽しむことのできる場所だと実感しました。

b:物乞い、花売り

生活の質ランキング一位のウィーンですが、実際に行ってみて驚いたことは、道端やホームに物乞いがいることでした。彼らは紙コップを持ち、” ICH HABE HUNGER” (英語で I am hungry の意味)と書かれたダンボールを掲げていました。中には小さな子供の映った写真を持っている女性もいて、私はその状況に胸を痛めずにはいられませんでした。ホストシスターに聞いたところ、彼女はこう言いました。「これらは日常的なことで、そして女性の方が多いの。」オーストリアではまだ女性の方が賃金が安い傾向にあるということと離婚が多いことによって、賃金の安い女性は貧しい状況に陥りやすいということでした。物乞いだけではありません。ウィーンを中心街では花売りにも出会いました。これらのことから貧富の差があることは明らかでした。ウィーンというと歴史や音楽など華やかな面が印象的だと思われそうですが、行ってみなければわからなかった状況を知ることのできた瞬間でした。

(3)最後に

今回の派遣は、普通の旅行では経験できないこと、そして現地の方々の優しさに溢れた2週間でした。何もかもサポートしてくださった葛飾区国際交流担当の方々とフロリズドルフ区職員の方々、ドイツ語面でサポートしてくださった通訳の方々、2週間で共に過ごした派遣団、そして2週間私たちを家族として見守ってくださったホストファミリーに感謝の気持ちでいっぱいです。



日本文化紹介にて参加者全員と

ホストファミリーはどの家庭も温かく、毎日の送り迎えや食事などの生活面を始め、プログラム以外でもウィーンの名所にたくさん連れて行ってくださり、毎日私たちを楽しませてくださいました。また、花火大会の日には私たち5人のために船を用意してくださったり、団員の誕生日には各ホストファミリーが誕生日ケーキやパーティー料理を用意してくださり、2週間、充実したステイをできたのは、ホ

ストファミリーの優しさがあったからだと感じています。最後は別れを惜しみ皆が涙しました。ホストファミリーとの絆はこの2週間で得た宝物の一つです。

将来国際的な仕事に就きたい私にとって、この2週間はかけがえのない貴重な経験となりました。葛飾区とフロリズドルフ区の友好関係がこれからも続くよう、これからもこのプログラムを影ながらサポートしていきたいと思います。本当にありがとうございました。

Introduce about my host family



今回私はゲプハルト家というお宅でホストマザー、ホストシスター2人、猫2匹の3人家族にお世話になりました。本当の家族のように接してくれ、おかげでかけがえのない2週間を過ごすことができました。そんな私のホストファミリーを少しですが紹介したいと思います。

【Host mother-Katalin-】

ホストマザーのカタリンはとても面白い人で一緒にいて毎日笑いが絶えませんでした。私たちがショッピングをしてきたというと、ファッションショーをして見せて！と言ってくれたり毎日出かける前にはなんて可愛い娘たちなの！と言ってくれたり、私に対して本当の娘のように接してくれました。帰り際「3人の娘がいた2週間はとても楽しかったわ」と言ってくれ、人柄の良さをも感じました。



【Host sisters-Laura and Caroline-】

19歳のローラと同年で16歳のキャロラインとは年齢が近いこともあり話す内容や興味のあるものが似ていて毎日の会話がとても楽しみでした。普段は自分が一番年上なため初めてお姉ちゃんと呼べる存在ができてとても嬉しかったです。送り迎えをしてくれたり、買い物の0から100までを彼女が教えてくれ、つかの間の妹を存分に満喫することができました。一番過ごす時間が多かったキャロラインはとにかく日本が大好きな女の子でした。彼女の部屋には日本のアニメや書道が飾られていて、勉強中の日本語も披露してくれました。日本語を教える代わりに、ドイツ語を教えてもらったり、一緒に買い物に行きお互いの洋服を選んだり、一日一日が楽しく過ごせたのも私がしたいことを尊重して予定を組んでくれた2人のおかげだと思っています。特にキャロラインとは悩みを相談しあったり、内容の濃い話をしたり、と言葉の壁を越えて仲良くなれることができ、彼女は私にとって本当の姉妹の样であり、最高の友達になりました。



かけがえのない思い出をくれたかけがえのない家族には感謝してもしきれません。いつかまた逢う日まで、その時は今回のお礼ができるといいなと思います。

Danke schön!

Two weeks homestay in Austria

小椋 詩乃

中学3年生の夏、学校の語学研修を通じアメリカ・ユタ州で1週間のホームステイを経験しました。初めての海外は戸惑うことばかりで帰国してから「もっとこうできたらよかったな…」と思うことが多くありました。また、それと共にそれまで日本の中では感じることはできなかった“世界とのつながり”を強く感じました。あれから、2年が経ち自分の住む葛飾区に海外派遣のプログラムがあることを知り、前回の反省を生かしてもっとたくさんの世界を肌で感じたいという思いで応募することを決めました。そんな特別な思いをもち、ウィーンで過ごして感じたことを少しですがこの報告書で紹介したいと思います。

①ウィーンの街並み

オーストリアと言えば多くの歴史的建造物が残っており、西洋の建造物を街中でたくさんみることができます。一つ一つの建物には細かい彫刻装飾がなされ、基本的に建物の色は白ですが人々が暮らす家はピンクやグリーン、イエローなども見受けられました。すべてが絵画から出てきたような街並みの中でも圧倒的存在感を放っていたのがシュテファン大聖堂で、シェーンブルン宮殿に並ぶウィーンのシンボルともいえる観光スポットです。ハプスブルク家の歴代君主の墓地であり、かつてのモーツァルトが結婚式を挙げた場でもあります。この教会は世界で3番目の高さを持ち343段の階段を上るとウィーンを一望する眺めを見ることができました。教会の周りには大きなショッピングストリートが広がっていて13世紀と現代の融合という不思議な景観に惚れ惚れさせられました。



シュテファン大聖堂

②ウィーンの食べ物

2週間の滞在では公式行事ではもちろんのことホームステイも含めたくさんの伝統料理を味わうことができました。その中でも5人いる私たち団員の1番のお気に入り、帰国の際最後まで飲んでいたのが、オーストリアで有名なものの1つであるアルムドゥードゥラというレモネードに似た飲み物でした。



アルムドゥードゥラ

どこにご飯を食べに行っても全員がそれを最初に頼んでいたため、それをみた区長さんは「こうしてオーストリアのものを好きになってくれてうれしい」ととても喜んでいらっしゃいました。またオーストリアは海に面していないため肉料理やジャガイモがメインで、日本と真逆と言ってもいい食文化なため毎日新しい食べ物に出会うことが出来ました。特にオーストリアのスイーツはどれも甘く、日本のあんこを使った自然の甘さとは違い砂糖を多く使ったヨーロッパらしいものでした。ウィナーコーヒーなどのコーヒーも有名な国だからこそ、甘いケーキとほろ苦いコーヒーを一緒に出すのはさすがだなと感嘆させられました。



いただいた伝統料理の一部

③ウィーンの人々と言語

オーストリアでは英語は日本語と同じ第二言語として学ばれており、国のほとんどの人が英語で話すことが可能です。2週間の間私は基本的に英語で会話を行っていましたが、ホストシスターにドイツ語を少し教えてもらいそれらで会話することにも挑戦しました。その中でも私の中で一番印象に残っているのが“Grüss Gott”（グリュースゴッド）という“こんにちは”を表す言葉と“Tschues”（チュース）という“さようなら”を表す言葉です。この2つはどこに行っても一番最初と最後にセットのように聞く言葉で、異国の地にいる私にとって現地の人とコミュニケーションをとるときの魔法の言葉のようなものでした。初対面の人でも友達のように接してくれるところに、オーストリアの方々の人柄の良さを感じました。また、私は同い年と3つ年上のホストシスターがいる家庭にお世話になり毎日夜は決まって今日あったことを話しあっていました。特に同い年のCarolineと二人でいる時間が多く、年齢が同じこともあり話す内容が似ていて毎日の会話がとても楽しかったです。言葉の壁はありましたがお互いに悩みを打ち明けたり、相談をしたりと壁を越えてコミュニケーションをとることができ、自分自身の英語力に自信を持つことができました。



ホストシスターが描いてくれた似顔絵

④ホストファミリーと日本

今回お世話になったファミリーは日本に興味を持ってくれており、特に同い年の **Caroline** の部屋には日本のアニメの絵や書道が飾られていたり、彼女自身が日本語を勉強していたりと日本が大好きな女の子でした。日本文化に興味を持ってもらえるか心配でしたが、私が紹介するもの一つ一つに喜んでくれました。茶道を披露すると、初めて飲む抹茶の味や正座で飲む文化にとっても興味を示してくれ、楽しんでくれました。また意外なところでは、私が宿題で本を読み設問の答えを書いていると、本が右から左へ縦書きで書いてあることに驚いていたり、私が書いていた文字を見て「ひらがなとカタカナと漢字が組み合わさっていてパズルみたい」といわれたり、私達にとって当たり前前に思えることに興味を示してくれました。昔ながらの日本の伝統文化を伝えることはもちろん大切ですがそれ以外にも私たちが当たり前だと感じていることを伝えられるようにすることも必要だと感じました。

2週間の滞在の中でたくさんの人に出会い、たくさんの経験をさせてもらいました。また、古くからの伝統を大切にするウィーンの人々や暮らしからはどこか葛飾と似た雰囲気を感じ取ることができ、改めて姉妹都市の理由を感じることができました。実際に行ってみなければわからなかったこと、実際に触れてみなければ知ることのできなかったこと、たくさんのことを肌で感じた2週間は私にとってとても考えさせられるものとなりました。この経験を活かし、まずは2020年の東京オリンピックに向け自分にできる活動はなにか、葛飾の国際協力にできることはなにか、を探し少しでも貢献できたらいいなと思っています。最終日家を出る前に私はホストファミリーとこんな約束をしました。“私が大人になったら必ずこの家に帰ってくるね、また会おう”と、帰国した今もお互いに連絡を取っていますがこの約束を果たすときに胸を張って会えるような人になりたいと思います。



Caroline と Laura と



団員のみんなと
フェアウェルパーティーにて

最後にこの様な貴重な機会をくださった葛飾区国際交流担当の方々、フロリズドルフ区の職員の方々、通訳の方、そして何よりも受け入れをしてくれたホストファミリー、一緒に2週間をすごした団員の4人、ありがとうございました。

ホストファミリー紹介

Alexandra Barth さん

私がホームステイした家のお母さんです。

ホームステイの日には兄弟たちと一緒に動物園に連れて行ってくれたり、私のために自分の部屋を貸してくださったり、ご飯をつくってくれたり、時には一緒に兄弟には内緒で夜食をいっしょに食べました。

とても愉快で心が広くて、時に厳しくて、いつもオシャレで可愛いお母さんです。正直言語の壁によってきつくなってしまった時期にアレクサンドラさんにたくさん助けられました。「あなたがしたいようにすればいい」といつも優しく声を掛けてくれた私の 2 番目のお母さんです。

Christian さん

アレクサンドラさんの夫です。ラジオ局で働いていて、アレクサンドラさんの車に乗っている時に時々彼の声を聞いていました。クリスチャンさんの職場に家族のみんなで行ったのを良く覚えています。彼の仕事ぶりはとてもすごくて、同僚の方々からもすごく信頼されていました。わたしにも日本語で話しかけてくれたりなど、一見すごくクールに見えますがとても優しくてユーモアに溢れている人です。



左から Michael、Alexandra、Christian、Stefanie

Willie さん

ホームステイ先の兄弟のお父さんです。アレクサンドラさんとは離婚をしていますが、ウィリーさんはずっと家にいてくれました。アレクサンドラさんともすごく仲が良く、今では親友のような雰囲気です。毎朝私を区役所前まで送ってくれたり帰ってくると優しく迎えてくれました。とても心が広くて少年のような方です。面白いにも関わらずすこし真面目な面もあって実は子供たちのことを一番に考えている方です。

Michael

私のホームステイ先の兄弟の弟です。彼は 13 歳でいつもプールに行き遊び回っていました。はじめはなかなか仲良くなれなくてご飯の時もあまり話せませんでした。でもだんだん話せるようになって最終日には一緒にピアノを弾いて歌を歌ったのを覚えています。

実はすごくやさしくて、私が食事中にフォークがないのに 1 番に気付いて持ってきてくれたり、紙を持ってきてくれたりなど本当に優しくしてくれて年上のような方でした。

Stefanie

私のホームステイ先の兄弟のお姉ちゃんです。年は私と一緒にステファニーとは友達のような感覚でした。一緒にショッピングに行ったり家族で出かけた時には私と一緒にいてくれました。ステファニーとはアレクサンドラさんに言えないような恋愛の話や学校の話などたくさんの時を一緒に過ごしました。ステファニーはとても明るくてお母さん想いで、優しく心が広くて、運動神経も良く、可愛くて、スタイルも良く完璧な女の子でした。



最終日の Stefanie との写真

ウィーン派遣を終えて

河東田 愛子

私は小さい頃から洋楽や洋画がすごく好きで日本とは違う文化を知ることがすごく好きでした。ウィーンは世界で一番住みやすい国と言われていて、とても気に入っていたので派遣が決まった時はとても嬉しかったです。

今回のウィーン派遣ではお菓子作りの見学をしたり、スペイン乗馬学校で実際にショーを見たり、みんなでハイキングをしたりと忙しくて濃い、どれもためになる2週間を過ごさせていただきました。そのなかでも私はずっとシェーンブルン宮殿に行ってみたかったので8月3日に行ったシェーンブルン宮殿はとてもよく覚えています。

シェーンブルン宮殿は世界遺産に登録されていて、ヨーロッパで最も美しいバロック建築（静的で理知的な豪華な文化の様式）と言われています。

まず黄金のような黄色の外観はとても壮大で観光客であふれていました。

シェーンブルン宮殿にはたくさんの逸話があるようですが当時6歳だったモーツァルトがこの宮殿に招待されマリー・アントワネットに対してプロポーズをしたという逸話があるそうです。中に入ると静かでゆっくりしているなんだか不思議な豪華できらびやかな内装が広がりました。



シェーンブルン宮殿

6歳のモーツァルトが演奏した鏡の間があり、金が張りつめられている非日常な世界観を感じました。当時は皇帝フランツ・ヨーゼフの権力がとても強く、彼のための部屋がたくさんありました。また、青い陶器が張りつめられた部屋は小さい女の子の夢のような部屋で私もなんだかそこに住みたくなってしまいました。金が張りつめられている部屋から可愛い部屋まで、どの部屋も豪華で、手拔きのない、息を飲む美しさでした。

他にもウィーンにはたくさんいいところがあります。私は特にウィーンの食事がすごく好きでした。食事に関して日本と違うところは、オーストリアでは揚げ物などこってりしているものに甘いベリーソースをかける文化があるということです。初めてのお昼ご飯を食べるときにシュニッツェルという豚肉や牛肉を揚げ焼きしたものをいただきました。その時に、すっぱいレモンと一緒に甘いベリーソースがついて、はじめはとても驚きました。日本では揚げ物などにはタルタルソースのようなサワーっぱいものをつけることが多いと思いますが、オーストリアでは甘いものや牛乳の風味がするバジルなどをつける文化があるそうです。オーストリアの食事はがっつりしたものをすこしマイルドにするといった印象でした。



シュニッツェル

みなさんにどうしても紹介したいオーストリア料理があります。それはフリターテンズuppeというスープです。



短冊状のクレープのようなものがコンソメスープの中に入っているものです。このスープは日本ではあまりないもので初めていただきましたが、日本に帰ってからフリターテンズuppeを飲みたくて仕方なくなってしまうほど美味しかったです。私がオーストリアで1番気に入った食べ物でした。もしオーストリアを訪れることがあれば必ず食べて見てほしい一品です。

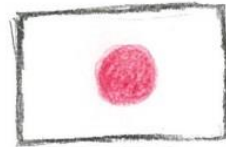
フリターテンズuppe

今回の派遣を通してコミュニケーションを自らしようとする心構えや人と関わろうとする気持ちがとても大事だということに気づかされました。オーストリアの人たちも母国語は英語ではないのに英語で話しかけてくれて、人の温かさに助けられることがたくさんありました。

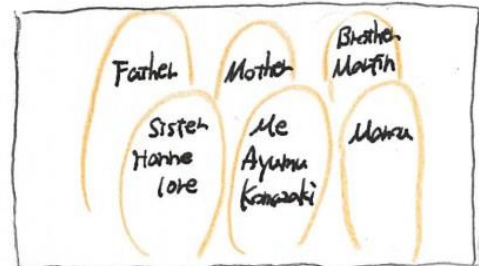
私のためにご飯を作ってくれていたり、日本食に連れて行ってくれたり、気を遣って広い部屋を用意してくれたりなど、ホストファミリーのみなさんには感謝しかありません。

また、このプログラムに関わってくださって全ての方々にウィーンの素晴らしさや、自分の成長を知ってもらうことで恩返しできればいいなと思っています。本当に貴重な体験をさせていただいてありがとうございました。この体験を思い出して自分から動くということを実践していこうと思います。

Haimdli



Family

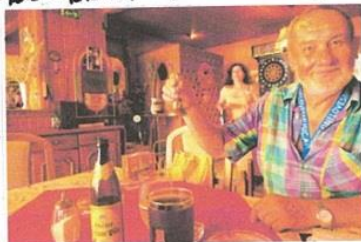


Sister Hannelore

マザーではありません。シスターです。いつも笑顔で今回は到着したときから私の不安を知らせてくれました。ひとりでくらして、最も長く一緒に時間を過ごした人です。車に乗って、街を走りぬけたり、おそろめの都市を案内してくれたり。家ではボードゲームをして、テレビを見てくつろいだり。たくさん思い出ができました。また、家族内では「英語で話すようにしてね」といったり。たくさん思い出ができました。ニックネームは「はな」です。日本が大好きで、言ってもわかるように配慮してくれました。ニックネームは「はな」です。日本が大好きで、東京はもろろん、富士山、日光、京都、奈良、長崎など、ここには書ききれないほど日本各地をまわっています。日本のみにぎりを家でもよくくつろいで食べて、日本のふりかけが常備されています。私はよくと塩辛いものをよくくつろいで食べて、喜んで食べています。

Father

もともとスタッフターとしての経験もかなりあり、回も各場所でもたくさんのお話を教えてもらいました。また、そのときにゆっくり英語を話してくれて、本当にききやすくて、勉強になりました。一緒にサイクリングに行ったり、途中のキャンプでソーセージを煮てくくったり、お昼に優しい良きスタッフターです。



Brother Martin

はなの兄です。一緒に暮らしているわけではありませんが、はなの家によく遊びに来てくれました。また、今回はハイキングに連れていかれて、山に登る間、彼の子ども時代のことなどたくさん話してくれました。山が好きでよく行くので、登り下りが速かったです。また、車の運転も速かったです。私の誕生日も手紙とプレゼントで祝ってくれて、楽しい思い出になりました。

Mother

マザーもまた、スタッフターとしての経験が長年あり、私をおたたくて迎えてくれました。スタッフターとマザーの家にお邪魔すると、ジュニツェルやサウダ、さらにはケーキまで準備してくれて、とても楽しくてくれました。

Manou

Martinの奥さんで、彼女もまた、一緒にハイキングに行ったり、はなの家で私が日本のことについて紹介する機会がありました。

ウィーンに暮らす人々について

駒崎 歩

もともと交通の仕組みについて関心があった私が、家族で初めて渡航した海外の地。それがオーストリア・ウィーンでした。東京とは大きく異なった、路面電車や接続バスなどの優れた公共交通の仕組みに、そのときはただただ感嘆していました。それ以来、もう一度その地を訪れ、生活してみることで交通の仕組みはもちろん、ウィーンの魅力を学びたいと感じました。そこで、この派遣事業のことを中学生のときに知った私は、高校生になったらぜひ参加したいと考えていました。

今回、私がお世話になったのは、Hannelore Haindl さんという女性の方の所です。ひとりで住まわれているので、たくさん話しをすることができました。彼女は日本について関心を持っていて、日本各地を回ったことがあり、部屋にはこけし、額に入った日本の風景などがありました。移動するのに鉄道を予約してくれたりおすすめの日本食レストランを紹介してくれたり、たくさんの私の望みをかなえてくれました。

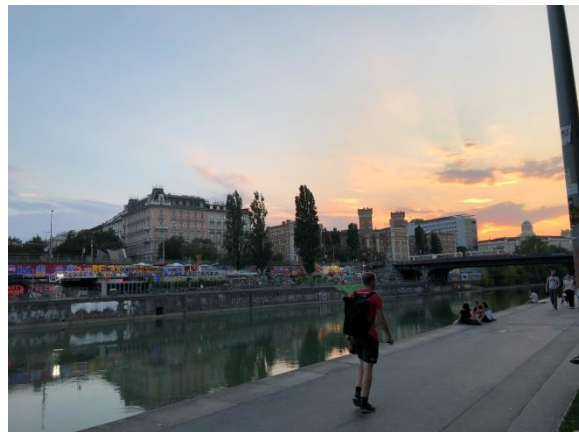


ドナウタワーから見たウィーンの街並み

この派遣を通して私が報告したいと思ったことは、道ですれ違う一人一人が朗らかで楽しそうな雰囲気を持っているということです。東京を歩く人がみなそうではないとは言いきれませんが、特に朝の東京を見てみると、時間とやるべきことに追われ、忙殺される人がほとんどだと感じます。ウィーンに暮らす人のように、軽やかに過ごすことのできる秘訣は何なのでしょう。

1 つめは仕事から早く帰ってくる人が多いということです。ホストマザーが帰宅する時間はわかりませんでしたが、私が帰宅するより遅くなることはありませんでした。夜に川辺を走りに行くと、たくさんの人が集まって食事などを楽しんでいました。仕事を終えた人たちも余裕のある表情でそれぞれの家や、お店へと向かって行くのです。その代わり、私のホストマザーは家でパソコンを使って仕事をしている様子も時々見かけました。そのような柔軟な働き方ができているのだろうと思われました。

2 つめは、人と人同士の距離感であると思います。通りや、電車に乗って過ぎていく駅をよく見ると、例えば、タンクトップ一枚の女性のように、他人に見られるための服装をしていないであろう人もよく見かけます。そこには、必要以上に他人の目を気にしないという考え方があるのだと思います。しかし、他人に全く無関心なのではありません。どちらか



夕暮れ時の川辺の様子

というとウィーンの人とは東京に住む人に比べて、多くのコミュニケーションをとります。同じバスを待つ人にも知り合いであるかのように、親しみを持って話しかける場面も多く見かけました。そのような絶妙な距離感が人に過度な意識をしなくてもよく、それでいて、孤独感を感じないことは良いところだと思いました。

3 つめは、やはり発達した公共交通機関だと思います。朝の時間帯にも乗る機会がありましたが、それほど混雑しているわけではありませんでした。また、夜間も含め、本数が多く運行されています。また、路面電車も運行されていたり、運賃の支払い方法が



路面電車の車庫

基本的に提示不要のフリーパス方式なので、非常に利便性は高いです。通勤・通学時のストレスが低減されたり、買い物や食事、娯楽のためにも出かけやすい街であるためには、重要だと感じます。

このように様々なことを感じ取ることができましたが、この良い点をそのまま東京に持ってくることは簡単ではないとも感じました。やはり人口密度が比較にならないほど小さいということが大きく関係しています。ウィーンでは、様々な場所に人が集まりすぎることがあまりないので、結果的に過ごしやすい環境が生まれているとも考えられるのです。しかし、東京に住んでいても余裕は作り出せると思います。そのためには、些細なことに腹を立てず、気持ちを穏やかにして構えることが重要だと思います。ウィーンで私が感じた空気からそんなことを考えさせられました。



アルテドナウからの夜景

最後に、今回の派遣事業の関わってくださった、葛飾区やフロリズドルフ区をはじめとする全ての方の多大なるご協力に深く感謝いたします。

My host family in Vienna

角田聖奈
Mitsuki Kakuta



左から順に…

Benedikt : 19 歳のホストブラザー。ギターの弾き語りが得意。現在は料理人になるべく、料理を大学で学んでいる。2017 年度の派遣団員で昨年度来日。日本のジブリ作品が好き。

Ernst : 57 歳のホストファザー。博識の高い方で、訪れた先々でその地の歴史などを教えてくださった。柔術を息子の Benedikt と一緒に習っている。

Anna : 23 歳のホストシスター。日本が大好きで、現在ひらがなとカタカナを猛勉強中。絵を描くこと、楽器を演奏することが特技。

Eva : 55 歳のホストマザー。至福の時間は、水着を着て自宅のハンモックで本を読むこと、くつろぐこと。いくつかの楽器が演奏できる。

SAYURI & YOKO : 2 匹の愛猫たち。家族全員、日本が好きだということとで日本語の名前が付けられている。

本当に、温かく素敵なホストファミリーの方々でした!!



ウィーンを訪れて

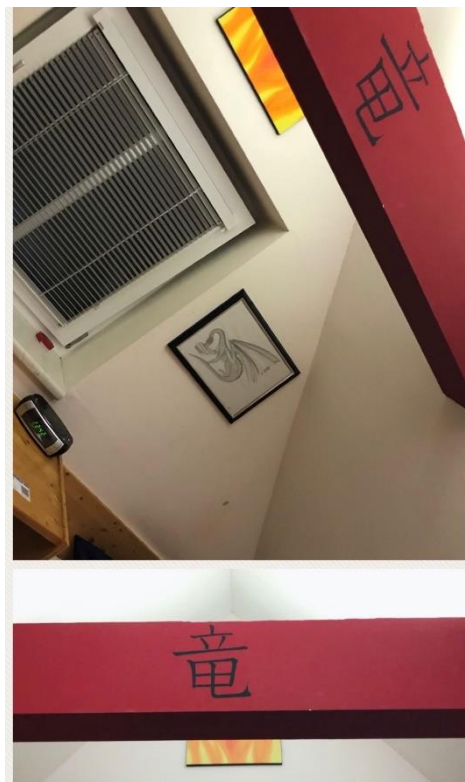
角田聖奈

「はじめに」

今回のプログラムで派遣団員として過ごしたオーストリアでの2週間は、毎日が日本では味わうことのできない刺激と充実感に満ち溢れていました。中学生の頃からバイオリンを習っている私にとって、音楽の都と呼ばれるウィーンは、いつの日にか行ってみたいと思っていた憧れの街でした。このように、以前からウィーンに強く興味と憧れを持っていたことが、この葛飾区青少年派遣プログラムに応募しようと決めた最も大きな動機です。プログラムへの参加が決定した時には、泣いて喜んだことを覚えています。これまでに二度、米国でのホームステイ経験がありましたが、オーストリアでの生活は、日本とも米国ともまた違い、とても新鮮で新しい発見が多くありました。

「第1章 親日家のホストファミリーとの生活を通して」

私のホストファミリーは親日な方々で、日本という国について積極的に学ぼうとしてくれていました。実際、ホストファザーとブラザーが柔術を習っていたり、毎食出てくる飲み物が日本産の茶葉で入れられたお茶であったり…と私が訪れる前から「日本ならではの」ものがすでに彼らの生活の一部となっていました。私がステイ中にお借りした部屋は、柱と梁が赤く塗られ、そこには「竜」という漢字が書かれていました。ホストファミリー曰く、以前日本を訪れた際に見た神社で鳥居の美しさに魅せられ、部屋に再現したとのことでした。部屋に鳥居を再現するという奇抜なアイデアと洋部屋と鳥居がどこかアンバランスに思え、



はじめは少し違和感を覚えました。しかし、毎晩ベッドに横になりながらその柱と梁を見つめていると、不思議と美しく魅力的に思えるようになりました。自国にいる時は、日本の文化や伝統に囲まれすぎていて、何が日本らしいのか、どんなところが魅力なのか、ということに気がつくことが難しいものです。外国で日本特有のものに触れ、客観視することで、日本の魅力を見出したり、再認識することができるということを彼らと生活を共にした2週間の中で学びました。

「第2章 音楽の都ウィーン」

私のたつての願いで、ウィーンに滞在期間中オーケストラのコンサートにホストファミリーに連れて行っていただきました。歴史のあるコンサートホールで、伝統的な衣装を身にまとった人々により演奏される音楽は、私が今まで聴いてきた音楽の中で最も美しく感動的でした。また街中でハープやグラスハープ、弦楽四重奏などのストリートパフォーマンスが行われる様は優雅かつ贅沢でそのクオリ



ティの高さにはとても驚きました。しかし、それらのパフォーマンスに足を止めて熱い視線を送っていたのはいずれも私のような観光客ばかり。現地在住と思われる人々は気に留めることもなく過ぎ去って行きました。日本におけるクラシック音楽とはどこか高尚なものと考える人も多く、非日常の世界と言ってもいいでしょう。ウィーンのようにクラシック音楽の溢れた生活環境は私にとって、まさに理想の生活でした。この環境こそがウィーンが「音楽の都」と言われる由縁なのだとすることを身を以て実感しました。

「第3章 英語を第二言語とする人々との交流を通して」

オーストリアの共通言語はドイツ語です。若者の一部は英語で話す人々もありますが、街中で聞こえてくる会話は圧倒的に英語よりドイツ語の方が多かったように思います。私のホストファミリー達も家族同士での会話はドイツ語だったため、気を抜いていると

ドイツ語と英語の切り替えに頭が付いて行けずファミリーの問いかけに返答できない、ということが何度もありました。初めの3日ほどは、この状況にとっても苦しめられましたが、今となっては良い思い出です。また、第二言語であるはずの英語をあまりにもホストファミリーが流暢に話すため、ファミリーのみなさんの言語能力の高さにただただ驚く日々でもありました。口語的というよりは、文法的で美しいお手本のような英語で話をしてくれました。オーストリアは英語圏ではありませんが、彼らのように模範的な英語を話す環境は、英語を学びたいと思う私のような人にとっても、行く価値のある国だと感じました。ドイツ語と同様、何の不自由もなく英語を操るホストファミリーとの出会いは、私自身の今後の英語を学ぶモチベーションに大きく繋がってくれました。

「さいごに」

冒頭にも書きましたが、オーストリアでの2週間は本当に多くの貴重な経験をさせていただきました。今年の夏の思い出はどんなものだったかと人に問われれば、一言では言い表せないほどの充実した夏だったと答えるでしょう。どの思い出にも共通して言えることはとにかく楽しかったということ。言葉の壁などは多少あったものの、毎日がいまだかつて経験したことのない宝物のような毎日でした。私にこのプログラムに参加する機会を与えてくださったこと、また面接や事前学習でお世話になった区の職員の皆様、オーストリアで私達のために携わって下さった方々…本プログラムに関わって下さったすべての皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



← ホストファミリーとの一枚